



三重県公立小中学校教頭会

〒514-0003 津市桜橋 2 丁目142

教育文化会館別館 3 階

TEL 059(228)2340

FAX 059(228)2271

E-mail : mieheadt@hyper.ocn.ne.jp

第60回全国公立学校教頭会研究大会札幌大会

「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」

豊かな心とたくましく生きる力を
育む活力ある学校づくりの推進

全体会に参加して

熊野市立五郷小学校 阪 口 典 久

〈郷土文化紹介〉

開会に先立ち、「札幌北野少年少女合唱団」が、北海道や夏にちなんだ美しい合唱を、「GOGO'S&クワザワグループ」は、オリジナルの「YOSAKOIソーラン」を披露してくれた。

〈開会行事〉

今年度の全国研究主題は「豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育」、サブテーマは「豊かな心とたくましく生きる力を育む活力ある学校づくりの推進」に設定された。

挨拶の中で、明治2年に探検家 松浦武四郎（三重県松阪市出身）によって「北海道」と命名され、今年で150年目に当たることが紹介された。また、「北海道から、元気な副校長・教

頭！元気な教職員！元気な子どもたち！元気な学校づくり！を発信したい」と熱く語られた。

〈基調提案〉

「学校教育の課題の解決に努め、副校長・教頭の職務内容や職務機能を追及し、研究成果を政策提言に生かすこと」を研究の基本方針とし、「継続性」「協働性」「関与性」に焦点をあて研究を進め、成果や課題を共有・深化させてきたこと、また、副校長・教頭には、未来を拓く子どもたちの成長を支える「チームとしての学校」を創り上げるマネジメント力・専門性・実践的指導力を高めていくことの必要性などが提案された。

〈全体シンポジウム〉

テーマ：「豊かな心とたくましく生きる力を育む活力ある学校づくりの推進」

コーディネーター：

勝野 正章（かつの まさあき）さん
（東京大学 教授・
全国公立学校教頭会アドバイザー）

「学校現場の課題は多種・多様で、教職員は責任を担ってきた。今教職員は過重労働の中、疲弊している。『チーム学校』体制で、連携・協働することが『活力ある学校づくり』につながる。」

シンポジスト：

野村 文吾（のむら ぶんご）さん
（十勝バス 社長）

「経営者として『社員を愛すること』を大切にし、誇り・自信・信念を培い、何事も『自己原因論』という視点で、取組を進めてきた。」

阿部 雅司（あべ まさし）さん
（スキーノルディック複合選手
金メダリスト）

「チームづくりで大切なのは『連携・協働』である。ポジティブな発言・行動が、チームワークにつながり、チャレンジし続けることが大切である。英語力の向上が、グローバルな人材育成につながる。」

安部 恭子（あべ きょうこ）さん
（文部科学省 教科調査官・
国立教育政策研究所 教育課程調査官）

「教職員全員が、同じ方向性をもち『学校づくり』に取り組むことが大切である。教頭は、ファシリテーターとしての役割を担い、リーダーシップ・フォロワーシップをもち、組織づくりを進めていく。」

それぞれの発言が教育実践につながる有意義なものでした。



第1A分科会

「教育課程に関する課題」に参加して

桑名市立大山田西小学校 吉 本 茂 甲

全国的に猛暑日が続き、日本列島が溶けてしまっているのではないかと心配になるようなこの夏。第60回全国公立学校教頭会研究大会が8月1日～3日の日程で札幌市において開催されました。熱気がまとわりつくような三重県に比べ、さぞかし涼しかろうと期待に胸を膨らませて北海道の地に降り立ちました。でも体感的には「???」というのが正直な感想でした。さすがの北海道も、この夏の猛暑の影響を受けていたようでした。

2日目は第1A分科会「教育課程に関する課題」に参加しました。本分科会では大阪市、札幌市から提言がありました。大阪市からは「学校生活に落ち着きがない」「規範意識が低い」こと等が生徒の学力向上の阻害要因となり、生徒が自らの将来への目標が持てない負のスパイラルに陥っている状況から脱するための実践が報告されました。実践の肝は「学校・家庭・地域の連携」です。どの学校でも大切にしていると思いますが、大阪市では行政主導で各中学校に「学校元気アップ地域コーディネーター」を配置し、事業として地域連携を推し進めているところが桑名とは大きな違いであると思いました。事業という枠組みの中で



取組をシステム化させることで地域と学校が実質的につながり、子どもたちの頑張りが地域からよく見えるようになったこと、そして学校と地域が共に活動を行うことで地域から生徒が褒められる機会を設け、それが生徒の自尊感情の高まりにつながったことが大変評価できると思いました。

札幌市の提言は、サブタイトルが「健やかな身体の育成のための教頭としての関わり」でした。今研究大会は「継続性」「協働性」「関与性」が提言や討議のキーワードです。「関与性」について自分としては興味があったので、札幌市の提言に注目し、討議にも積極的に参加しました。目標を達成するために進むべき方向性を明確にし、必要な情報を職員間にとどまらず、家庭や地域、外部人材とも共有すること、そして、具体的実践を価値付けしながら、適宜外部へ発信することで、PDCAのスパイラルアップを実現する「調整役」として教頭が関与していくことの面白さを学びました。

全国の仲間と有意義な討議ができたことに大満足して宿泊地へ徒歩で向かいました。空は快晴でしたが大変清々しい空気で、大通公園を気持ちよく歩くことができました。このような機会を与えていただきありがとうございました。



第1B分科会

「教育課程に関する課題」に参加して

大台町立三瀬谷小学校 中山 恵子

私が参加した1B分科会は、2つの提言を受け、37グループ（1グループ7人程度）に分かれて研究協議を行いました。

1つ目の提言は、山口県山口市教頭会の「子供の学びや育ちを支えるコミュニティ・スクールや地域協育ネット、小中連携の推進～実践・連携を支える教頭の役割～」でした。

提言を聞いて驚いたのは、山口県ではコミュニティ・スクールの設置率が100%、地域協育ネットの設置率が100%でした。これは、県の方針で「やまぐち型地域連携教育」として取り組んでいるとのことでした。

この提言では、校内の担当者と地域の担当者が実質的な活動を進めていました。教頭は、担当者のサポートをします。また、同じ中学校区内の小中学校との合同学習活動等は、教頭同士が連携して進めていました。組織作りがうまく行われており、地域の力が十分に活用されている印象を受けました。

- コミュニティ・スクールという言葉を使わなくても同じような取り組みは各学校にある。新しく何かをするのではなく、今やっている地域活動を大切に、職員が入れ替わっても継続していくことが大事である。
- 地域との連携では、目標の共有が大切。その教育活動を通してどのような力をつけるのか、どのような子どもに育てたいのかをはっきりさせる。

との助言者の言葉が心に残りました。

2つ目の提言は、北海道十勝管内教頭会の「十勝の特性を踏まえたカリキュラム・マネジメントの充実～校内組織づくりと地域・校種間連携における教頭の役割を通して～」でした。

人材育成（特に若手の）と職員の参画意識が話し合いの中心となりました。会場の参加者や助言者からの意見の中で次のようなことが心に残りました。

- 人材育成については、今の学校だけでなく、将来の学校に寄与する人を育てるという意識を持つ。風通しのよい職場を作り、日々の生活に育成の視点を生かすことが大事。
- 職員全員が参画意識を持つためには、校務分掌を固定化しない。ねらいをはっきりさせて取り組み、反省し、次の活動に生かす。

他県の方と情報交換をしながら同じ話題について話し合い、多くのことを学んだ1日でした。



第2分科会

「子どもの発達に関する課題」に参加して

伊勢市立五十鈴中学校 松村 絵里



第2分科会では「子どもの発達に関する課題」について次の3つの提言がなされた。

- 1 「地域とともに子供を育てる学校づくりの推進における教頭の役割～地域の教育力を生かす連携を通して～」

愛媛県大洲市立三善小学校

- 2 「未来を担う子供たちに豊かな人間性を育む学校教育～子供の発達を支える教育を通し生徒の豊かな人間性を育む教頭の役割～」

北海道函館市立深堀中学校

- 3 「地域や家庭との連携を図り、共に生きる心と知を育む活力ある学校づくりと教頭との関わり～特別支援教育の充実～」

北海道札幌市立本郷小学校

地域との連携をより充実させるため、地域コーディネーターが活動し始めている地域がある。地域コーディネーターは教職経験のある人材であったり、教職経験がない地域の人材であったりと、それぞれ地域の実情に応じて様々である。地域コーディネーターを活用することにより、

教員の負担を軽減し、地域の教育力を学校教育活動に生かすことになる。教頭は地域コーディネーターと教員との調整役を担う。

また、函館市と札幌市で実施した教頭アンケートでは、「特別支援教育は学校運営上の重要度が高い」との結果であった。児童生徒への対応や教職員への啓発、専門機関との連携等において、教頭の果たす役割は大きい。一方、課題として、教頭が多忙であり、様々な対応について教職員と協議する時間が十分確保できないことや教職員を育成することなどが挙げられていた。時間の確保や人材育成については、地域に関係なくどの教頭も直面している課題である。

3つの提言を聞き、その後グループ討議で全国の教頭と意見を交流して、教頭の役割やその仕事について改めて考える機会になった。地域との連携や特別支援教育の視点は、どの学校においても教育活動に取り入れているが、今後、多様な子どもたちの発達を支えるため、「開かれた教育課程」や「カリキュラム・マネジメント



ト」により、様々な主体との一層の連携や協働は欠かせない。教頭として、教育活動を俯瞰的に捉え、連携の要としての役割を果たすとともに

に、教頭間での交流や連携等を一層密にして、教育活動の充実に向けて取り組んでいきたいと思う。

第3分科会

「教育環境整備に関する課題」に参加して

四日市市立山手中学校 小林 正 英

1 本目は、宮崎県日南市立鶴戸小学校の藤堂孝浩先生からの「学校における非常災害への対応はいかに図ればよいか ～非常災害時の教頭の対応を考慮して～」についての提言であった。日南市には南海トラフ地震による津波が到達すると予想されている地域に5つの小中学校が存在する。様々な場面を設定し、日頃から地域と連携し、関わることで、また、人員確認・関係機関への通報・避難指示等について教頭としての役割について提言していただいた。また、同じグループには、宮城県気仙沼市の先生もみえて、東日本大震災時の様子や現在までの取り組みについて教えていただくことができた。教頭として、多様な想定・想定外の想定に基づく準備、地域・関係機関・近隣の小中学校との日常的な情報交換や連携、継続的な防災マニュアルの見直し等の重要性について痛感させられた。

2 本目は、北海道浦河町立荻伏中学校の盛永美樹先生からの「日高の課題（学校の教育力向上）の解決に向けた教育環境整備に関わる教頭の在り方 ～地域との連携・協働と組織体制づくりに向けたチーム教頭としての取組～」についての提言であった。日高地区は東西約200kmからなり、学校数は小学校27校、中学校15校、計42校からなる。日高地区の課題として話された「校内におけるビジョンを明確にした人材育成及び地域との相互理解と補完性を大切にした連携・協働の体制づくり」といった、学校と地



域を関連付けた教育環境整備を適切に行うために、日高地区42名の全教頭が「チーム教頭」として、同僚性を発揮し、継続的な連携・協働体制を確立しながら、課題解決に組織的に取り組む3年次計画の提言であった。また、同じグループの新ひだか町立静内中学校の先生からは、さらに詳しく、日高地区の「人材育成」や「校務分掌等組織運営の改善」についての課題や成果についての説明を聞くことができた。

3 本目は、札幌市立札幌小学校の加藤勝宏先生からの「社会に開かれた活力ある学校づくり ～教頭がつなぐ学校の安全・安心～」についての提言であった。札幌市は10区、小学校203校、中学校99校から成る。危機管理「RSSC」（Reasonable～納得を行動につなげる～・Speed～万全の計画と準備につなげる～・Share～チームとしての協働につなげる～・Catch～職員室

のリーダーとしてつなげる～)を軸とした登下校の安全確保、不審者情報への対応、災害時の地域・関係機関との連携、情報管理等についての提言であった。

3本の提言を通し、同じグループ内の北海道や宮城県の先生方と意見交流ができ、改めて、教

頭として現状に満足することなく、職員・保護者はもちろん学校を支えていただく全ての方々と
の良好な人間関係・ネットワークを構築しながら、子どものためのより効果的な取り組みを進めることを示唆していただけた。有意義な時間を過ごさせていただいたことに感謝いたします。

第4分科会

「組織・運営に関する課題」に参加して

四日市市立中央小学校 奥井 工

本分科会では、岩手県の小学校および地元北海道の小・中学校各1校で計3本の提言がなされた。岩手県の長井小からは、学校運営協議会の設置に合わせて地域交流を推進していくため、地域コーディネーターを設置し、取組の円滑化を図るという体制整備が紹介された。また、地域交流の恒常化のため、保・幼・小・中連携に関する報告がなされた。北海道の江別第二小からは、中学校区内での小中連携推進にあたって、学校運営協議会を軸にして、地域交流や地域協力を活性化していく取り組みが報告された。同じく北海道の月寒中学校からは、地域人材を活

用した学習支援による学びの保障を充実させる取り組みが報告された。教頭が校内特別支援コーディネーターと連携し、個々の生徒に必要な人材を確保すべく、教育委員会等関係機関といかに効果的な連携を図るかという内容であった。

いずれの提言も地域や運営協議会、あるいは関係機関との関わりを、学校運営に活かすための教頭としての在り方について述べられたものであった。また、提言後の討議を行うグループ内の学校は、来年度導入予定の1校をはじめ、大半がコミュニティスクール導入3年未満で、運営協議会の在り方や教頭としての連携の在り方を模索しているところであった。そのため、グループ討議ではほとんど共通した討議の柱(厳密には各提言ごとに指定はあったのであるが)により、シームレスなグループ討議を行うことができた。

提言の中で紹介された各校の取り組みは、度合いに差はあるもののいずれの学校も取り組みを自校単独で行うのではなく、小中間で連携して取り組んでいこうという意図が感じられるものであった。地域連携の活性化のために、小中をはじめとした中学校区異校種間連携は極めて有効な手立てであるが、決して易しい取り組みではない。提言後助言者の方から、コミュニティ



スクール導入は目的ではなく目的実現のための手段であること、異校種連携の活性化や教頭異動後の体制維持のためにも、全教職員に重要性や目的を浸透させること、そのために恒常的な

情報と意識の共有化を欠かさないこと、というお話をいただいた。グループ内の情報交換と併せて、今後の取り組みに大いに活かせる内容であった。

第5A分科会

「教職員の専門性に関する課題」に参加して

鳥羽市立長岡中学校 増田直紀



日本中が猛暑や大雨、台風など、様々な気象災害に悩まされる中、8月1日から3日間、全国教頭会研究大会「札幌大会」に参加する機会を頂いた。

当日は朝6時48分に津のなぎさまちに集合すると、高速船・飛行機・バス・宿など、すべて予約してもらっており、迷うことなく快適に研究大会に参加させて頂いた。

第5A分科会では、「ベテラン教員の大量退職、ミドルリーダー不足、若年層増加」という現状を受け、2つの提言があった。

1つ目は、千葉県市川市の提言で、市の行政が「小中連携」を前面に掲げることで、教職員の意識改革や指導力向上を図っている実践であっ

た。「中1ギャップ」「不登校児童生徒への対応」「発達障害」など多くの小中学校がよく似た課題を抱えている。小中連携は古くから言われているが、ともすると形骸化しがちである。小中の教職員がFace to Faceで本気で互いの良さを学び合い、9年間を見越した児童生徒の育成を図ることで、諸問題や指導力向上に活かしている取組は、逆に新鮮で、大きな成果に繋がることを実感した。

2つ目は、北海道稚内市の提言で、チームとしての協働体制の構築と教職員の学校運営参画に向けた取組への教頭の関わりについてであった。継続性、協働性を念頭に置きながら、各勤務校において教頭の関与性を切り口に教職員の資質、能力の向上を図るマネジメントサイクルを基盤とした研究について、多くの実践例を紹介し、説明して頂いた。グループ別討議の中で大分県や北海道では自校昇任も多く、勤務していた学校で、今度は管理職として学校づくりを進めている話を聞き、驚くと共に、なるほどと思った。助言者の先生からは、「元気な教頭が活力ある学校の基盤」と結んで頂き、責任を痛感した。

今回、快適な環境の中で全国の教頭たちと学び合うことができ、大きな刺激を受けた。この経験をこれからの仕事に活かしたい。

第5B分科会

「継続性・協働性・関与性」から鑑みた教職員の 専門性を高める教頭のマネジメント

紀北町立船津小学校 北 村 協 右

「学校評価を活かした教頭のマネジメント」を中心に協議が進められました。この大量退職、大量採用の時代に「学校力」の維持・向上という喫緊の課題の中で、いかに教職員の専門性や指導力を向上させるかについて、数多くの意見交換がなされました。その中には、市町で一本化された学校評価を行っているというところがあり、他校との比較や経年変化が見やすいという利点があるという報告がありました。さらに、「特色ある学校」としての『各校に応じた独自の学校評価』として、「各校独自に『校長経営ビジョン及び学校の課題から作成した評価票』も活用して、遺漏なく評価しているという実践もありました。

その学校評価の効率化の手立てとして、教頭・副校長が幅広く関わり、進捗状況を職員各自が把握できるように、ロードマップを作成し作業・仕事の可視化を図ることによって、効率も向上し職員のモラルも高まったという成果も発表されました。

課題としては、学校規模（職員数）の違いにより、学校評価がうまく機能しないケースも多々



あるのではないかと意見や、「学校評価」と「学校からのアンケート」をしっかりと立て分けて考える必要があり、『単に学校に対しての意見を幅広く聞く』だけでは経営品質の向上につながらない、PDCAのサイクルを稼働させる中で学校評価自体の質の向上を目指すべきであるという意見がありました。

さらに、外部講師の招聘という点で、教頭としてのマネジメントを行う場合に学校評価を人材育成や学校改善につなげていく方策の創造・検証が大きな意味を持つことが確認され、教頭・副校長が主任層に対して、ミドルリーダーの育成という視点をしっかり持つことが大切であり、



その育成の成果を見るために「児童生徒の変容の視点」というものについて冷静な分析が不可欠であると確認されました。

そして、学校評価をどのように学校改善に活

かすかがこの分科会の討議の柱で有り、そのためにも、教職員の参画意識の向上や効率的な組織化を工夫することは大切で、教頭のマネジメントの高まりが期待されるとまとめられました。

第 6 分科会

「副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題」に参加して

名張市立すずらん台小学校 澤 正 人

第6分科会では、全国教頭会の調査結果について分析の報告がありました。また要請文についての提案もありました。その後、中教審の「学校における働き方改革特別部会」の専門委員である東北大学大学院の青木栄一准教授から「副校長・教頭の超・長時間労働の実態」「その改善方策」「取り組むべき業務と求められる資質・能力」について講演がありました。超がつく長時間勤務の内容は、「授業もこなし、学校経営を行い、それ以上に事務に忙殺され、外部対応も土日行う」とまとめられ、「教育界の持続可能性は危険水域」と述べられました。改善方策は、国・教委・学校が「仕事量を減らす」か「不確実性（何が起こるか分からない）を減らす」しかないと言われています。他地域の方策として「留守番電話の利用」「長期休業期間の閉校（一部開校を含む）」「公務補助員の配置」

などが提示されました。教頭は、「部下を指導するのではなくただ傾聴することが大切」「人材育成に喜びを見いだす」「業務改善・タイムマネジメントの主役という自覚をもつ」などとまとめられました。

午後からは、午前の提案を受けて、6人程度の小グループに分かれて、話しあいを進めました。各校や自治体の実態は異なっており、教頭の2人配置や業務補助員の配置（東京都府中市）などの人的資源の手当は進んでおり、留守番電話の活用や休業中の閉校日の設定なども、多くの地域や学校で実施されていると知りました。

学校でできることの示唆を受けましたので、列挙しておきます。「ミドルリーダーを育てることで教頭業務を軽減する」「苦情対応の研修を行う」「学校行事を精選する」「運動会を午前中に終わらせる（札幌市全小学校）」「校務支援ソフトを活用する」「帰る時刻を朝に申告させる（周知とマネジメント）」「PTA役員の活用」「蛍の光を流す」などがありました。

教育という業務は無定量で終わりのないものです。しかし仕事であれば割り切りも必要です。ここまでという「終わり」を決めて、そこから逆算するという発想が大切だと思いました。こ



れまで行ってきた「どんどん積み足して、結局時間切れで終わる」というある種、計画性のない働き方は改めなければなりません。教頭自身

の働き方はもちろん学校全体の働き方改革を進めていくのは、私たち教頭であると強く感じた分科会でした。

特Ⅰ分科会

「学校…楽しい、認められる、輝ける場に!」

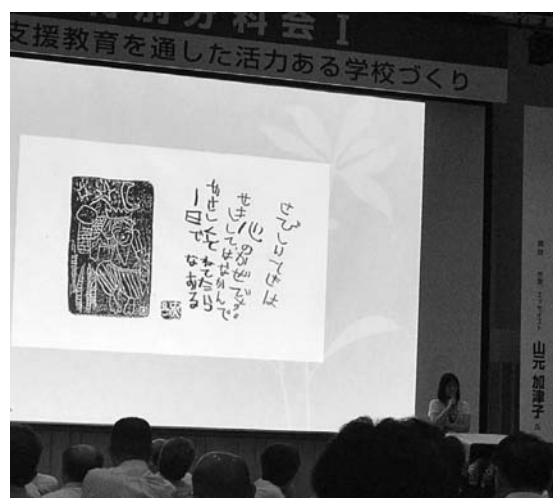
亀山市立加太小学校 中西 佐智子

特別分科会Ⅰは、特別支援学校で長年勤務され、現在作家・エッセイストとして活躍されている山元加津子さんを講師に招き、「大好きは魔法のことば」と題した講演を聞いた。

山元さんが教師生活の中で出会ったたくさんの子どもたち。その中で山元さんが学んだこと、特別支援学校での勤務の体験談から、担任した子どもにどのように関わったのか、関わる中でどのように子どもが変容したのか、医者や保護者が不可能だとあきらめていたことでも、子どもたちが大好きだという山元さんの思いからさまざまな奇跡を起こしたことなど、一人ひとりについて具体的に語られた。そして、まずは子どもたちとの間に関係性を築くことが大切であると熱く語られた。また、みんなが自分のことが好きでいられると、周りのことも好きになる。毎日学校に行くことが楽しいと思ってくれたら、一人ひとりが輝ける、認められるようにできれば、より活力のある学校になるのではないかとこの示唆をいただいた。

午後からは、「特別支援教育を通した活力ある学校づくり」をテーマに約250名が33のグループに分かれて協議した。

前半は、山元さんの講演を受けて感想の交流をした。子どもたちの奇跡のような変容に胸が熱くなり、涙をこらえながら聞いていた半面、



この実践は特別支援学校での1対1の実践であり、そのままを自分たちの学校現場には持ち込めないと感じたこと、関係性を築くことはどの子に対しても大切であることなどの意見が出された。後半は、特別支援教育に関する校内支援体制の作り方や保護者対応の難しさ、現在困っていることなど、活発に意見交流をした。まずは、特別支援教育についての先生方の理解を深めることが大切であるということ、そして先生方の役割の明確化を行うことが、活力ある学校づくりにつながっていくのではないかという意見でまとまった。

今回、様々な方との交流を通して多くのことを学び、大変有意義な時間を過ごすことができた。この学びを周りに広げるとともに、これからの自分の成長につなげていきたい。

特Ⅱ分科会

「北海道から元気の発信!」

鈴鹿市立旭が丘小学校 世 古 基 子



特Ⅱ分科会は、北海道教頭会が独自に課題を設定し、2つの講演とグループ協議という形式で分科会が行われました。

午前は、「北海道を元気にする企業努力とそのスピリッツ」をテーマに株式会社セコマ代表取締役社長丸谷智保さんのご講演でした。「北海道にはたくさんの素晴らしさがあり、それらを掘り下げていくことが大切」「物事をどのように見て、どのように捉え、前向きに考えること、発想を転換させることが大切」が信条の丸谷社長。株式会社セコマの地域貢献や働き方改革、健康や高齢化への対策など、企業としての努力についての具体的なお話を通して、社長自身の「北海道を元気にする」という経営者としての熱い思いに触れることができました。グループ協議では、グループ内で出された質問に、34のグループをまわられていた丸谷社長から、直接回答していただくという好機会に恵まれました。

た。やる気があり、役割を果たす人を育てることが大切であることを教えていただきました。

午後は、「新学習指導要領のもと笑顔あふれる活力ある学校づくりをめざして」をテーマに、文部科学省教科調査官渋谷一典さんのご講演でした。まず、新学習指導要領の背景にある社会情勢について説明があり、これからの社会を生き抜くためにどんな力をつけていかねばならないのかが確認されました。次に、清水市の小学校を例に、子どもが学びの中で輝く姿と意欲的に授業改善に取り組む教師の姿が紹介されました。それらを通して、仮想学校教育目標をたて、理念を明確にして、教頭として何をするのか、何ができるのかをまとめる演習に各グループで取り組みました。グループ協議で、各地の先生方と語り合えたことは、単にテーマの内容にふれたことだけでなく、貴重な経験となりました。

総括の際に、丸谷社長からのメッセージが紹介されました。「教頭先生たちは、さまざまな課題を抱え、大変であるが、そんな中だからこそ、工夫が必要となり、発想が豊かになるのではないかと。楽観的な気持ちでモチベーションを上げて、身体を大切にがんばってほしい。」と励ましの言葉をいただきました。経営者としてやるべきことと、教育に携わる者がやるべきことは同じであり、それは人を育てることが一番の仕事であるということから始まった丸谷社長のお話は、教頭としての自分を見つめ直すとともに、今後のあり方を示してくれました。

E・YAZAWAのすすめ

度会町立度会中学校 濱 口 誠

69歳のオジサンロック歌手を40年くらい追いかけてきた。毎年コンサートには、最低2会場ぐらゐは行くので、たぶん100回は行った。いっしょに行くのは同じ教師仲間ばかり。実は三重の先生にファンは多いのだ。行ったことのない人を連れて行くのもおもしろい。まるで宣教師のごとく、ベストCDを作り、「本番までに予習しといて。」と言って渡す。初めて行った人は100%驚き、感動し、満足する。会場ではみんなに一体感が生まれ、知らない人と仲良くなる。別のアーティストのコンサートにもたくさん行ったが、あんな会場は他にない。1985年（阪神日本一）の甲子園ライトスタンドに近いものがある。コンサート終了後、九段下（武道館周辺）の飲み屋に入ると、そこはタオルを椅子に掛けた同志たちでいっぱい。隣の席のグループと意気投合し、最高の一夜となる。

クラスの生徒に、私が熱烈なファンだとよく言っ



ていたので、保護者懇談で「実は私もコンサートに行くんです。」という話題で盛り上がることも多かった。子ども放ったらかしで。どこの学校でも必ず同志がいるのだ。やんちゃな生徒の親に多かったので、便利だった。「矢沢先生の言うことはちゃんと聞け」的な感じ。また、卒業式前に生徒が「うちの担任はあなたの異常なファ



ンです。卒業式に何か贈り物をしたい。」という手紙を出したら、本人からメッセージやサインをいただき、私にプレゼントしてくれたこともあった。教頭になってからも、車にシールを貼っているのを目ざとく見つけて保護者から声をかけられ、親しくなることもよくある。「先生、今度の東京ドーム取れた？」とか。全然知らない生徒が、「昨日お母さんとガイシ行ってきた。最高やった！教頭先生も行ったん？」などと言いにくる。そんなことで人が繋がっていく。こんなアーティスト、他にいる？

ファンは彼を69歳だとは思っていない。40年前と変わらずパワフルにマイクターンをしてケツ振ってシャウトしているからだ。ただ、最近はMCが増えた。休んでいるのだ。こちらありがたい。最近、さだまさしに負けないうくらい話もおもしろくなってきた。さあ、もうすぐボスに会える。ということで、9月調査は校長に任そう！

郡市だより

『津市南地区音楽学習発表会』について

津市立一志中学校 小林 清 人

「津市南地区」は、三重県内の市町で最大の面積を持つ津市の一部分で、旧久居市と旧一志郡の一志町・白山町・香良洲町・美杉村にあたる地域です。街並みを少し離れると、田畑や野山の広がるのどかな地域です。平成18年の合併で現在の津市となり、この12年の間に様々な統合が行われ、学校現場も少しずつ変化をしてきました。ただ、わずかではありますが旧一志郡・久居市の頃の行事が現在に引き継がれている地域でもあります。その一つに「津市南地区音楽学習発表会」があります。旧一志郡（旧久居町を含む）の頃に、中学校の音楽学習発表の場として、合唱だけでなく吹奏楽部の発表もあわせて1日かけた行事として



始まり、それから50年以上がたちました。その間に少しずつ形を変え、開催場所も中学校の体育館から「久居市民会館」へ、そして現在は津市白山町の白山総合文化センター「しらさぎホール」へと移動しました。「津市南地区音楽学習発表会」となった現在は、南地区の7校の中学校の「合唱」の発表の場となっています。多くは校内の合唱コンクールで優秀賞をとった学



級が出演していますが、出場をめざして各中学校のコンクールは大変盛り上がります。小規模校では学年全体や学校全体で出場するところもあります。迫力でせまる団体、美しさでせめる団体・・・等、なかなか聞き応え、見応えのある発表会となっています。

旧津市（現在の津市中地区）は吹奏楽部など部活動中心の音楽発表を行っており、旧安芸郡（現在の津市北地区）は特に行事がなかったこともあり、合併で津市の一部分となったこの12年間、存続を考えなければならなかったことが何度かありました。このような中で、実行委員会を中心に様々な問題を乗り越え、現在に至っています。会場までバスでの移動が必要なため、予算の関係もあり、さらなる発展は難しいものの、現在、中学校だけ



ではなく小学校も参加できる方向にしようという案も出てきています。子どもたちにとって、スポーツ部門の陰にかくれがちな芸術部門の数少ない発表の場として、今後も存続・発展させていきたいものです。

